The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	序　中国研究集刊　日本中国学会第四十五回大会　特別号（第15号）
Author(s)	加地, 伸行
Citation	中国研究集刊. 1994, 15, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/60855
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

序

加地伸行

平成五年九月二十五日（土）・二十六日（日）の両日、日本中国学会第四十五回大会が吹田市文化会館（通称メイシアター）において開催された。大会の準備会は、大阪大学（代表：加地伸行）が担当した。そこで本号は同大会の記念号として特集することにした。

収録するのは、（一）第一日に行なわれたシンポジウム（当日配布のレジュメを含む）の記録、（二）第二日に放映したビデオの解説（当日配布）、（三）大会要項（田仲一成氏の特別講演自身は同氏によって論文化され、本誌宿号にすでに登載済）、（四）シンポジウム報道記事、ならびに準備会委員名簿である。

ただし、（一）のシンポジウム記録において、島田虔次氏の部分は、大幅な補訂があり、また、当日配布資料は省略されている。ただし、新しく注解がなされている。そのため、シンポジウムの事実記録そのままではないが、より正確な記述をという同氏の熱意に従った。もっとも、論旨において大きな変化はない。

なお、当日のシンポジウムには、日本中国学会会員以外、約五十名の方々が参加された。マスコミ関係者の他、儒教文化研究振興会会員として同大会開催を物心ともに支援してくださった招待者であり、われわれ研究者の真剣な討論を知っていただき、中国研究について理解を深めて下さった。

日本中国学会は、単に自分たちだけの研究にとどめず、シンポジウムあるいは講演や映像という場を設け、会員外の方々にも扉を開く努力をすべきであろう。われわれは趣味で学問研究をしているわけではない。あくまでも、広い意味での社会的要請を背景としての研

究である。もちろん、それは実用的な研究をするとか、世間に媚びるということを意味するのではない。個別具体的な専門研究を行なう一方、包括的一般的な問題提起や議論を行ない、個別と普遍との相関を形成するたゆまぬ努力が必要という意味である。しかし、現実には、個別具体的研究へと逃避する傾向がある。いわゆるタコ壺型の研究である。第四十五回大会において、あえてシンポジウムと特別講演と映像とを企画したのは、包括的一般的なありかたへの努力としてである。そしてそれが平明なことばで語られるならば、会員外の方々にも理解できるはずと思っている。そこに、学問と現実社会との接点の可能性があるだろう。

いま、大学を中心として研究者を囲む環境には極めて厳しいものがある。かつての大学教授のような、特権的地位にあって給料をもらって超然と生活することのできる時代は終った。国公立であろうと私立であろうと、その給料は国民の税金によってまかなわれていることは事実であり、国民は納税者の目で研究者を見るようになってきている。それには国民の学歴が高くなり、大学卒業生が激増したことと大きな関係がある。

われわれ中国学研究者は、世間に対して「研究をしてやっているんだ」というような従来の傲岸な態度ではなくて、「研究を現実社会に還元する」という、国民的活動への参加の意識を持つべきである。従来のような、傲岸でかつタコ壺への逃避だけでは、国民から見捨てられることになるであろう。そのとき、中国研究は衰退する。われわれの研究がどれほど重要でありかつ社会になくてはならないものであるかということの国民的理解を得るためには、すこしでもそのための努力が必要である。

昨年のシンポジウムは特にそれを意図したものである。今後の学会のありかたへの一つの例となることができれば幸いである。

私たち準備会の意図をお汲みとりくださり、快よく基調提題者をお引き受けくださった島田虔次・陳舜臣両先生、代表討論者となって下さった佐藤慎一・井波律子両先生、司会者の河田悌一先生、特別講演講師の田仲一成先生を始めとして、全参加者諸公に対し、心より感謝の意を表し申しあげる。